
王と王妃の婚姻契約

澤野アイ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

王と王妃の婚姻契約

【ZPDF】

Z133300

【作者名】

澤野アイ

【あらすじ】

サイアス王は苦悩していた。この度娶った王妃と交わした「婚姻契約」。ああ、なぜこんな契約を交わしてしまったのか。王は今日も胃薬を飲む。麗しい王妃と、美しい寵姫、そしてへタレな王の「めでたしめでたし」で終わるには少しばかり情けない物語り。

00 プロローグ（前書き）

本編内に男同士のカップルが登場しますが、内容には全く関わりはありません。

昔々あるとこに、ジグジア国という大国がありました。ある時の王様が、同盟の証として小国のお姫様を娶ることになりました。

けれど王様にはすでに、とっても愛している大切な女性がいたのです。

え？ なんだって？

ああ、そつぞ。これは誰もが知ってるサイアス王のお話しだよ。

知ってるから他のお話がいいって？
でもね、僕のお話は一味違うのさ。
君たちがお母さんから聞いた、甘ったるいおじいちゃん話じゃ
ないよ。

もつともつと、馬鹿馬鹿しくて面白にお話しちゃ。
さて、じゃあ氣を取り直してもう一度。

#我々あるとこ――――――

00 プロローグ（後書き）

初めての投稿で右も左もわからない状況ですが、少しでも楽しんでいただければ幸いです。

? サイアス王の悩みは恐らく、大陸一といわれるスニーフ谷より深い。

? 執務中も、食事中も、鍛錬中も、寵姫と共にいるときでさえ心にあらずだ。

? 今までに無い様子に、お仕えする者たちは医者だ薬だと大騒ぎ。

? 食事にはいつもその気が配られ、朝晩には医者の診察、寵姫も心を込めて慰め続けた。

? しかし、いつも王の悩みは晴れず深くなるばかり。

? そんなある日、王妃から見舞いの品が届いた。

? 王は喜んで見舞いを受け取ったが、添えられた手紙を見て、とうとうパタリと倒れてしまった。

?

? 王の側近エドワードは、不敬と知りつつも寝台横に投げ捨てられた王妃からの手紙を拾い上げる。

? ほんのりと甘い香りが焚きしめられ、女性らしく丁寧な文字で短くこうあった。

? « お加減はいかがですか。お疲れが溜まっているのでしたら、『寵姫さまと避暑にでも行かれてはいかがでしょう。留守は万事お任せ下せ』ませ』

? 美辞麗句、媚び、必要以上の気遣いすら無い、王妃らしい簡潔な手紙だ。

? エドワードは、王の悩みも倒れた理由も瞬時に理解した。

? 彼は幼少の頃より常に王の側にあって、視線ひとつでその意を

汲む。

? 心よりの忠誠を誓い、誠心誠意仕え、王の悩みとありませの命を賭してでも払拭したい所存である。

? しかし、この悩みはいたさか難しい。

? 何故なら、全では王の血業血得であらわされるからだ。

? サイアス王は悩んでいた。

? 書類の内容も頭に入らず、どれほど豪華な食事も味わえず、鍛錬では十代の新兵に打ち負かされ、龍姫を愛でる氣にもならないほど悩み抜いていた。

? それでも何とか執務をこなしていたのだが、とうとう王妃からの見舞いの品を受け取ると倒れてしまった。

? 良い年をした男が、それも一国の王が、このよつな悩みで倒れるなど笑止千万だ。

? おまけに、こんな状況を作り上げたのは他ならぬ自分である。情けないことこの上ない。

? 気怠い体をどうにか起しつゝ、王妃から贈られたお茶を飲んでみた。

? 王妃の生国でしか取れぬ貴重なこのお茶には、疲労回復の効果があるらしい。

? 濃い紅色の茶からは異国の甘い香りがし、まろやかな舌触りは極上だ。

? 飼染みのない異国の味は、王妃の姿を思い起しあせる。

? この国の王妃となつても、異国の香りを漂わせる麗しい姿を思い出し、身悶えた。

? 諸悪の根源である契約書をいつそのこと破り捨てて燃やしてしまいたい。

? ああ、なぜあのよつな契約を交わしてしまつたのか。今さらながら後悔しきりである。

? 王は、王妃に恋をしていた。

? 実る見込みの無い絶望的な恋が、彼を蝕んでいるのである。

王は再び自己嫌悪で具合が悪くなり、キリキリと痛む腹を抱え寝台に倒れふした。

0-1 Hの実験（後書き）

機能を理解しておらず、すこし手間取りました。
試行錯誤です。

『ジグジア国王とコパーナ国第十二王女との婚姻契約書』?

・この婚姻は両国の同盟強化の証である。よつて愛は不要とする。

・夫婦はお互いの私生活に干渉することを禁ず。

・公私を分け、公では良好な夫婦関係を演じること。

・妻が望むならば夫はある程度妻の元へ通い世継誕生に努める。

・この契約書に署名するならば、王妃の地位待遇と金献上量の減量を約束する。

上記の契約書を引つ下げ、サイアス王は輿入れしたばかりの王妃の居室へと乗り込んだ。

ベールで顔を覆つた王妃は、突然の王の来訪にやや戸惑つた様子である。

しかし、王が挑戦的な仕草で契約書を突きつけると、素直に契約書を手に取つた。

王には、身分低い侍女であつたために、妃に上げられずにいた長年の恋人がいる。

側室にすることすら許されず、ならばと片端から縁談を跳ね除け続けこの年齢まで独身で通してきた。

ところがとうとう「いい加減に妃を娶つて世継をへ」と泣き出した臣下たちを丸めこみ。この度異国の姫を王妃として娶ることで、

恋人を寵姫として召し上げることを力技で認めさせたのだった。

彼は生涯に渡り寵姫しか愛さず、また愛せないという強い自信があつた。

そうして考え出した結果が、この契約書である。

？王妃の生国ユーパーナは、金山を抱えるだけの小国だ。國土の大部分は砂に埋もれ、気候も厳しい。

しかし周りを囲む列強諸国にどうては金山は喉から手が出るほど魅力的な宝だ。

常に国境線でジグジアと睨みあつていたユーパーナは、ついにこの度ジグジアの強大な軍事力の庇護下に入り、属国と相なつたのであつた。

？

？王が求めるのは、彼と寵姫の穏やかな生活を脅かさない、分をわきまえた王妃だ。

？王は、丁寧に契約書に目を通す王妃を静かに観察した。ユーパーナでは女性は常にベールを被り家族以外のものに素顔をさらすことはない。

その慎み深いベールで隠され、王妃の表情を窺うことは出来ない。しかし、王族であれば正しく政略結婚の意味を理解しているであろうし、悪い条件ではない。

まして属国からの貢物の王妃だ。聰明であるならば、否を唱えるはずがない。

「つまり、陛下の愛する方は『ご寵姫』まだひとり。私との間に愛は存在せず、公の場でそれらしく振る舞えば、私の自由を認め、地位待遇や金銭上量の減量までお約束して下さると。そういうことであ

よろしこでしょうか」「

愛らしき声でゆつくつと確認すると、ぴたりと押し黙る。王の王妃は思ったよりも聰明なようだ。

ところが、満足気につなづく王の後ろでエドワードは青ざめいた。

まさか王がこのような契約書を作つてゐなどとは想像もしていなかつたのだ。

せりに追い討ちをかけるように、王妃の侍女のが凄まじい殺氣をこじりに向け威嚇してゐる。ベールの下から牙でも飛び出しそうな勢いだ。

「ああ。どうだ、悪い話では無いと思つが」

王妃は背筋を伸ばし、真つ直ぐに王を向いてゐる。

「はい。大変素晴らしい契約ですね。さつそく署名したいのですが、よろしいでしようか? ここあなた、ペンを下さいな」

ためらひごともなく、弾むような王妃の言葉に、エドワードと侍女を始め、王までもが呆気に取られたよつて固まつた。

「お、王妃さま。その、非常に突飛で不躾な申し出ですが、誠によろしこので……?」

思わずエドワードがおずおずと口を挟む。

「そうですよ、姫さま。こんな人を馬鹿にした話がありますか!」

王妃の耳元で囁く侍女の声もつわざり丸聞こえだ。

聰明であれば、必ず署名するだらつ。しかし一国の姫としての誇りがあるならば、自尊心を傷つけられ憤慨するはずだ。

まさかこつもあつたり、しかも嬉々として承諾されてしまつとは

予想外である。

「もちろんです。喜んでお受けいたしますわ。ありがとうございます」

す

慌てて用意されたペンで手早く署名を済ませると、王妃はおもむろに自らのベールを脱ぎ去つた。

「改めてまして、シェイラ・アル・ユーパーナでござります。サイアス王陛下、これからよしなにお願いいたします。そうですね、出来れば良き友人のような関係で」

王妃は亞麻色の髪を揺らし、にっこりと微笑んだ。

「あ、ああ。私はサイアス・リイン・コシア・ジグジアだ。こちらこそ、よろしく頼む」

間抜けにも口をぽかんと開けたまま、名を返すのがやつとだつた。王妃はますます笑みを濃くする。そつすると、涼やかな目尻がわずかに下がり、口元には笑窪が出来た。

な、なんだこれはつ。

王は突然襲われた動悸に驚き、心臓を押された。

沸騰したように血が逆流し、指先からじびれていくよつだ。

ちょっと待て。コパーナの民といえば褐色の肌と髪だらう。

なんだ、あの蜜を溶かしたような黄金色の肌は！

おまけに、あの目と笑窪は反則だらう、たまらんや。

ああ、あの柔らかな肌に余すことなく口づけ、無理やり組み敷いてしまいたい！！

「陛下？」

Hドワードの呼びかけに、王ははっと正氣に返った。

俺は、今なにを……。いかんいかん、危うく持つていかれるところだつたぞ。

「そろそろ失礼しよう。ゆっくり休んでれ」

王は体にこもる熱を抑えこみ、足早に王妃の居室を後にした。

この日、めでたく王と王妃の婚姻契約は成立した。
けれども、まだまだ「めだたしめでたし」とはいかないようで……
むしろこの日から、王の苦悩は始まったのである。

?

02 Hの契約書（後書き）

Hさま性格悪いかんじですが
彼が悪いんじやないんです
そういう風に育てられちゃつたんですよー
哀れ

03 王妃の素晴らしい結婚生活

砂漠の国ユーパーナから、大国ジグジアに嫁ぎ早半年。王妃の結婚生活はこれ以上ないほど充実している。

王妃とはいえ所詮は属国の姫に、ジグジア国内ではこの婚姻に反発や疑問視する声も多い。

その上、もし両国の関係がこじれたならば命すら危うい立場だ。悲痛な覚悟で嫁いだ王妃だが、待ち受けていたのは、予想もしていなかつた王からの『婚姻契約』の提案だつた。

考えるまでもなく、二つ返事で受け入れた。ユーパーナ国からただひとり伴つた侍女のサーナは、

「こんな男に都合の良い契約がありますかっ！ 姫さまを馬鹿にしていますわ！！」

と怒り心頭で喚いていたが、王妃には自らに都合の良い契約に思えてならなかつた。

私生活に干渉されないので、自由に友人を作ることが出来、趣味に興じても何を言われることもない。

公で仲の良い夫婦を演じることなど造作もなく、王妃が望まぬ限り体の関係を結ぶ必要もないと、何と素晴らしい話だろ。

それなのに、王妃としての地位待遇は保証され、献上金の減量まで約束してくれていいのだ。

「私の姫さまはこんなにもお美しいのに、蔑ろにされて黙つてはおれませんわっ」

実際、王は寵姫の元で生活を送つてゐる。決まった日にしか王妃

を訪れないでの「冷遇される王妃」と皆には認識されていた。

ゆえに蔑みの声も届くが、栓無きこと諦めてしまえば、さして

氣にもならなくなつた。

何より、王妃は王を好ましく思つてゐる。

龍姫への愛を貫く、誠実で素晴らしいお方だ。高圧的などこりはあるが、常に良い友人のように接してくれているし、申し訳ないほど氣遣つてもらつてゐる。

王が苦惱しそぎて倒れたその日。王妃は友人を居室に招き、午後のお茶を楽しんでいた。

「うーわー何だこれ、すっげ美味いっすよ王妃。何入れたんすか、何使つたらこんな深い味わいとコクが出るんすか。不思議な味、でもチーズの風味を少しも邪魔してない。むしろ相乗効果で至高の味に近づいてる……っ」

リツツ・ハルマンは大げさに天を仰いで髪を搔きむしった。

「だあーだめだつ。分かんねつ、降参！」

「もう降参ですか？ 実は、ほんの少し煮出したお茶で風味を付けただけなのですよ。もう一口食べてみて下さいな

お茶？！」

リツツは一口食べて、再び唸つた。ここ最近、王妃には負けてばかりだ。今日のチーズケーキも文句なく美味い。

「そう簡単には負けられません。なんと言つても王宮専属菓子職人との合作ですから」

晴れやかに笑う王妃の顔は、子供のように輝いている。

「ずりーっすよ、それ」

リツツは王妃の大切な友人のひとりである。財務省の役人の彼とは、趣味のお菓子作りを通じて知り合つた。

砕けた態度で、率直な言葉をくれるリツツは大切な友人だ。

「そういえば、タキスはまだ戻らないのですか？ 確か、十日ほどで戻ると」

王妃は軍務で北方領視察へ向かつたもうひとりの友人のことを思い出した。

「はい。ちょっと天候がおもわしくないらしくて。山間部で手間取つてるらしいです。でも明後日には帰つて来ますよ」

「そう、寂しいですね。ね、リツシ」

うふふ、と王妃が含みのある視線を向ければ、リツシはたちまち耳まで赤くして俯いてしまつた。

幼馴染のリツシとタキスは、まあなんと言おうか、からかうと可愛らしく赤面してしまつような仲なのだ。

「これ、陛下にもお届けしようつと想つのですけれど、どうぞ？」

王はあまり甘いものを好まない。だが今日のチーズケーキならば甘すぎず王の口にも合つと思つのだ。

「それは喜ばれますよ。最近体調悪そうですからね」

王宮では周知の事実を、リツシはさらりと口にした。当然知つてゐると思つていたのだが、王妃は知らなかつたらしい。

ひどく驚いた様子の王妃に、リツシは「マズイことしたかな……」とそそくさと退室してしまつた。

本当は、真つ黒な笑顔のサーナに「余計なことをしてくれて、ありがとうございますわ」と蹴り出されたのだが。

王妃はすぐに見舞いの品と手紙を届けさせた。

お見舞いがてら自ら届けようかと思つたが、サーナに「ご寵姫さまが付いておられると思つますわ」と言われ、でしゃばつた真似を

あるところだったと反省した。

王妃は本当に、王に深い感謝を捧げている。

この充実した日々をくれたことへ、ほんの少しでも恩返しがしたくて、離宮への避暑を勧めた。自分に何が出来るとも思えないが、王の数日の中守へらい守つてみせよ。

しかしその手紙によつて、とうとう王が倒れたことなど、王妃は知るよしもなかつたのだった。

03 王妃の素晴らしき結婚生活（後書き）

リツツヒタキスはラブラブです。
王妃さまはいつも甘てられっぱなし。

サイアス王は足取りも軽く王妃の居室へと向かっていた。手には王妃の好む焼き菓子の箱を持っている。

今日は王妃と会う約束はしていないのだが、見舞いのお礼という立派すぎる理由があるのだ！

頑張れ自分、攻めるの自分、王は意氣揚々と王妃の元へと向かつた。

しかし、王妃の居室から見知った顔が出てくるのを見て、浮き立つていた気持ちは一気に萎んでしまった。

あれは……タキス・バッケンレー大尉。

王の脳内でタキスの情報が素早く取り出される。

王は、一いち方に氣づき伸びやかな動作で膝を折る男を冷ややかに見つめた。

タキスは、王妃の愛人と噂される男のひとりだ。

見上げるような長身に、鍛え上げられた厚い胸板。太い首の上に乗った顔は無骨さが目立つが、柔らかく弧を描く目や口元が人好きする印象を与えている。

貴族出身の武勲華やかな功績を持つこの男は、女性人気も高かつたはずだ。

?

おそらく北方領から帰還したその足で王妃に会いに来たのだろう。そういえば、奇跡的に天候が回復し一日早く帰還したと報告が上がっていた。

敵の動向は抜かりなく把握している王である。

ちつ。いっそのまま雨に流されてしまえば良かつたものを。

誰が声などかけるものか。

王はタキスを無視し、素早く王妃の居室へと滑りこんだ。扉を閉め、気を落ち着けるために大きく息を吸う。

「タキス、何か忘れ物でもしまし……まあ陛下？」

扉に背を向けていた王妃が慌てて立ち上がった。

「驚きました。もうお加減はよろしいのですか？」

王妃は結婚後、ベールは被らず常に素顔をさらしている。

公の場以外では生国の習慣で生活しても良いと考えていたいた王は、「私ももうジグジア国民ですから」の一言で完全にベールを取り去ってしまった王妃に驚嘆したのだ。

褐色の肌と髪が普通のコパーナの民には珍しい黄金色の肌と亞麻色の髪は、母君が西方人のためらしい。

やや緊張している王の正面に腰かける王妃は、相変わらず麗しかった。

「一日休んだら楽になつた。心配をかけたな」

はあ。なぜ俺はもっと気のきいたことが言えないのか。他に言つべきことが、伝えたいことがあるだろつ。ままならぬ己の口が不甲斐ない。

「ようしいのですよ、そのようなこと。陛下が健やかでなくては国は立ち行きません」

ふふふ、と愛らしい口の端が上がる。

その艶やかな唇を凝視していた王は、慌てて視線をそらし、手に持つたままだつた焼き菓子の箱を思い出した。

「昨日の茶が効いたようだ。これはジグジアの伝統的な焼き菓子で、今では作れる者もいなくなり、レシピも失われつつあるらしい」

途端に王妃の目が輝き、目尻がへにゅつと下がる。

「まあ！ 文献では読んだことがあります。数少ない作り手も皆ご高齢のはず。そのような伝説の焼き菓子をいただいてよろしいのですか？！」

王妃の甘党ぶりは凄まじいものだ。宝飾品や流行の衣装などには欠片も興味がないらしい。

結婚当初、若い女性なら当然喜ぶだろうと用意した贈り物はことごとく撃沈し、悪戦苦闘の末やけつぱちで贈った異国の菓子に手を叩いて喜んでみせた。

その時は、「一緒にいただいてくれませんか？」とお茶の誘いがあつたほどだ。

それ以来、王妃への贈り物は必ず甘い菓子と決めている。

「王妃のために用意した物だ」

この笑顔を見るためならば、影の諜報機関を総動員し、たかが老人を探すことぐらい何でもない。

「本当にありがとうございます。本当に嬉しいです。でも……」

輝く笑顔のまま、王妃はこう続けた。

「でも私ひとりで独占してしまつのはもつたいないですの、リツツとタキスと大切にいただきますね。きつと二人とも喜びます」王のほのかな期待は、ガラガラと大きな音を立て、崩れ去つた。泣きたい。

「ぶつ、くくく」

思わず吹き出しちしまつた王妃の侍女は、慌てて無表情を装つた。

『夫婦はお互いの私生活に干渉することを禁ずる』

この条項のせいで、王は王妃の私生活に干渉することが出来ない。リツツ・ハルマンとタキス・バッケンレーとはどういう関係なのだ？！まさか、噂通り愛人などと言うのではあるまいな？！

王妃の華奢な肩を押さえつけ、問いただしたい。しかし、口が裂けてもそんなことは出来ない。

ああ、なぜ俺はこんな条項を契約に入れたのだ！！

じつして、今日も見事な黒星を飾った王は、なぜか必死に笑いをこらえている侍女に見送られ、憔悴した様子で自室へと帰つて行つたのだった。

いかんな、また胃の調子が……

04 Hの純情（後書き）

伝説の焼き菓子……

おそらく、後継者不足で技が失われて行く
伝統工芸みたいなものかと……

「ボロボロこぼすな、子供かお前は」タキスはリツツの膝上に落ちるパイのクズを見て、思わず手を伸ばした。

「ばつ、誰が子供じゃーつか、王妃の前つ」ナフキンを膝に広げてやり、口元についたクズを親指の腹でそつと拭つてやる。あまつさえ、その指をペロリと舐めたタキスに、リツツは耐えきれず声を上げた。

「ん、ああ」

目の前の王妃の存在をすっかり忘れていたタキスは、とりあえず生返事を返す。今度はリツツのパイを食べやすいよう一口大の大きさに切り分けてやつていて忙しいのだ。

「申し訳ありません。つい……」

悪びれもしないタキスに、王妃はにっこりと微笑んだ。

「気にすることはありませんよ。ただ、あまりに仲が良すぎて、少し照れてしまいますが」

王妃は困ったように、リツツから視線をそらす。その後ろで、ニヤリと嫌な笑顔を浮かべたサーナが、おもむろに首筋に手をやつた。リツツはその意味を理解した瞬間、顔を真っ赤にし髪を搔きむし始めた。

「王妃つ！そんなこと言わないで下さいよ。ここはガツつと田の前でイチャつかれるのは不快だつてはつきり言つて下さいよーーもつ、本当すんません。恥ずい真似してすんません。お前も馬鹿だらうー。そーゆーことは一人つきりの時以外すんなつて言つてんだろ。しかも、目立つとこに跡つけんなつてあれほどーーあー穴があつたら入りて一つかお前を突き落としてー」

フォークを握りしめたまま立ち上がり吠えるリツツを、王妃はまあまと宥め座らせた。

ちなみに、その口元はしつかりと扇で隠されている。

この東屋は、庭園の奥に位置し人の出入りは少ないが、いつ誰が聞いているか分からないのだ。

そろそろ夏も終わりかという頃。今日は珍しくリツツとタキスが連れ立ち、王妃の元を訪れていた。

気分を変え、散歩がてらこの東屋でお茶をしていたのだが、彼ら二人がそろつと、途端に賑やかになる。

「雨」

王妃はポツポツと降り出した空を見上げ、眉根を寄せた。

「明日は降らずにいてくれると嬉しいのですけど」

「あ、明日つすかお出かけ。そしたら俺、城下の美味しいもんリスト作るつすよ」

「お出かけ？」

「城下の孤児院と病院をいくつか訪問する予定なんです。子供たちと外で遊びたいので、晴れてくれると嬉しいのですが」

実は、王妃も毎日お菓子ばかり食べているわけではない。慰問や謁見など、割り当てられた公務はきちんとこなしているのだ。

空を見上げていた顔を戻すと、難しい顔しているタキスと目が合ひ、苦笑した。

おそらくタキスは、王妃への風当たりが強い中、公務とはいえ城下に下りることを案じてくれているのだろう。

しかし今回の慰問は、しぶる王に無理やり頬みこみ、王妃自ら組んでもらつた予定だつた。

王妃がジグジアに嫁ぎ、両国の国交は日に見えて盛んになった。最近では、ジグジアの街でも褐色の肌を持つ芸人や商人、旅行者の姿も珍しくはない。

しかし、未だ異なる色彩を持つ彼らを犬猿する者がいることも事実だ。

私が外に出て姿をさらすこと、民同士の交流をもつと活発に出来たな……

「それはお出かけではなく公務だ」

「一緒じゃん」

「全く違うだろ」

再びじやれ合いを始めた二人を、王妃は微笑ましく見つめる。性別、身分、肌の色、宗教。全てが違うジグジア人の彼らと、こんなにも親しくなることが出来たのだ。

私も、もっと民族の垣根を越え、たくさんの人と親しくなりたい。国民にもそうあって欲しい。

それは遠い未来だとしても、決して不可能ではないだろう。

その夜。就寝の挨拶をするサーナに、王妃が甘えるように抱きついた。

これは、王妃の癖だった。何かあると、こうして生まれた時から側にいてくれるサーナに頼ってしまう。

いくつか年上のサーナは世慣れていて、今までもらつた助言に聞違つたことはひとつもないと信じている王妃だ。

「ねえサーナ。私、王妃となつたらもつと辛いことばかりと思つて

いました。けれど、良き友人に恵まれ、サーナも変わらず側にいてくれています。とても幸せ……ですが」

「姫さま」

子供の頃したように背をさすりながら、サーナはにじむ涙をそつと拭う。

毎日を楽しんでいる王妃に、一番安堵しているのはサーナだ。王の契約書には憤死しそうなほど頭にきたが、今では良かつたと思つてゐる。

リツツとタキスについても同様で、毒の無い彼らをサーナは割と気に入つてゐた。何より、からかいがいのある美味しい連中だ。

「ですから、サーナなおりいつて相談があるのです」

王妃は可愛らしい仕草で、サーナの耳元に顔を近付けた。

それから数日後、王妃は見事な爆弾を落としてみせた。

それにより、サイアス王の胃痛はとうとう不治の病となつたほど

の、破壊力抜群の爆弾である。

05 王妃の素敵な仲間たち（後書き）

リツツは良くなきスマートをつけています。
王妃さまはいつも黙つて視線をそらします。
そしてタキスはお仕置きを……

副宰相は肥満気味の体を揺らし、「本日の午前中分の報告は以上です」と締めくくった。

可決、保留、却下。

サイアス王は報告を受けながら、その手は休むことなく凄まじい早さで書類をさばいている。

副宰相が持ちこんだ書類は、報告を終えるまでの短い時間に全て分類し終えてしまった。

「分かつた、西街道の整備と盜賊被害については即刻検討しよう。国土交通省、財務省、軍の担当者を集めておけ。次にリダ国大使の訪問日程だが、我が国の豊穣祭に合わせてもらえるよう調整しろ。王宮で舞踏会もある、ちょうど良いだろう。それから、ホラスト元大臣は追い返せ。あ、この保留分の書類を忘れるなよ。各省に戻し、調査書を提出せしろ」

「かしこまりました。しかし、ホラスト元大臣にはお会いにならなくてよろしいので？」

副宰相は、取次の間で「陛下に会わせり」と怒鳴り散らす男を思い出し眉をしかめた。

しかし王は、それ以上に不快感に顔を歪め、却下にした書類をぐしゃぐしゃと握り潰している。

「時間の無駄だ。あいつめ、新しい妃などいらぬと言つているのに、元恐ろしくしつこい。絶対通してくれるなよ！」

事情を理解した彼は、ホラスト元大臣の押しの強さに疲れきつて

いる王を氣の毒に思つた。

しかし、あわよくば己の息のかかつた娘を王間に上げようと企む貴族は、ホラスト元大臣だけではない。

多くの貴族たちは機会を窺い、隙を狙い、様々な手で王に新しい妃を娶らせようとするだろう。

何しろ現在の妃は、属国の王妃と、侍女上がりの寵姫だ。あまりに後ろ盾が弱く、力が無い。

その上、王にはまだ世継ぎがない。

ショイラ王妃を側室に降格させ、他国の姫君を王妃に迎える方が良いのではないか、と考える役人も多い。

そのような状態では、強欲な貴族たちが何かを期待してしまつのも仕方のことなのだ。

その夜。政務を終え寵姫の元へ戻つた王を迎えたのは、困惑した寵姫と、やけに興奮している侍女たちであつた。

差し出された盆の上には、王と寵姫宛の手紙が一通ずつ。

なんと、先ほど王妃から届けられたのだという。

今までに無いことに、王は何事かと慌てて手紙を読み、目を見開いた。

『アンリエッタさま。突然のお誘いで申し訳ありません。つきましては明日の午後、私のお茶会にご主席いただけないでしょうか。私的なお誘いですので、どうぞお気を楽にして、普段通りでいらして下さいませ。ショイラ』

『ひらは寵姫宛の手紙だつたようだ。そこには丁寧な文章で、お

茶への誘いがしたためられている。

な、なんだと？！

慌てて、もう一通にも田を通した。？

『明日の午後、ご龍姫さまをお茶にお誘いしたのですが、よろしいでしようか？』

相変わらず素つ氣ないほど簡潔だ。余分は全て省略され、要件のみ、王への挨拶すら無い。

王は力無く長椅子に座りこんだ。

「あの、陛下……王妃さまはご本氣で？」

朝露に濡れた鈴蘭のごとき清楚な美貌の龍姫が、そっと王に寄り添い腰をあおる。その瞳は不安気に揺れている。

「本気だろ？ 王妃はたいそうな甘党で、趣味が菓子作りだ。振る舞いたいのだと思うぞ」

龍姫はこくりと頷き、王の夕餉を整えている侍女たちを困った様子で見上げた。

「大丈夫ですアンリエッタさまー私たちがついておりますー！負けてはなりません！！」

すっかり臨戦体制の侍女たちは、力強く拳をかかげてみせる。

「言われた通り普段着で行ったりしたら、きっと笑い者になってしまいます！ 明日はこれでもかつてくらいい、気飾りましょーう！！」

「そうです！ イヤミを言われたら、一ヶ口笑つて陛下のホクロの場所を教えて差し上げればいいんです！！」

「その通り！ アンリエッタさまは悲劇のヒロインなのです！ 大丈夫、最後には勝ちます！！」

侍女たちは、すっかり王妃の誘いを龍姫に対する挑戦状と受け取つていて。

何やら声高に叫び、愉快なポーズを決めてみせる侍女三人。

王の前で、とんでもない」とを口にする侍女たちを、寵姫はオロオロと黙らせた。

「もうあなたたち、いい加減になさい。王宮ロマンス小説の読み過ぎよー！」

寵姫が気兼ねなく過ごせるように、明るい気性の者ばかりを選んだのは間違いだったのだろうか。

寵姫アンリエッタは慎ましく控えめで、まるで奢ったところのない女性だ。何しろ、王と長年恋人関係にありながら、周囲の者に一切悟らせなかつたほどの慎み深さである。

王が一日惚れしたその儂げな美貌は、最近ますます磨き上げられ、眩しいほどだ。今やアンリエッタの名は国中に知れ渡つていた。

寵姫は没落した下級貴族の娘である。

家族のために下働きとして王宮に入り、王の侍女にまで出世した苦労人だ。

美貌・教養・品格も素晴らしい、ざいに出して見劣ることはない。

未だに侍女気質が抜けず、いらぬ働きをしようとすると欠点といえば欠点だ。

しかし、だからこそ王宮に勤めてる女性からは絶大な支持を得ていた。

「どうする、アン。気が進まぬなら断つておくれ。王妃はそれで気を悪くする人ではない……ああ、それからお前たちも、そのように氣を張らなくとも王妃に他意は無い」

侍女たちが、えーと不満気に頬を膨らませた。

ベタベタな女の戯いを期待していたらしい。平和な証拠だ。

「いいえ、行つて来るわ。せつかくのお誘いだもの」
王は、微笑む寵姫の肩をそっと抱き寄せた。

恐らく、本当に王妃に他意は無い。純粋にお茶を楽しみ、親しくなりたいだけなのだろう。

しかし、なぜ今さらなのか。王は首を傾げた。

王と王妃は、今まで一度も寵姫の話をしたことは無かつた。全く関心が無いのだろうと、悲しくなる反面 ホツとしていたのだが……

…何やら非常に気まずい。

王妃への恋心は誰にも知られていないはずだ。しかし、寵姫への罪悪感に、また胃が痛み出す。

しかし、王宮において王妃と側室の交流ははいたつて普通のこと。王は深く考えずに、胃薬を飲んだ。

この時王は、事態の深刻さを全く理解していなかった。

突然足元に降ってきた爆弾を、王はその小ささに油断し素通りしてしまった。

これより以後、何度も「時を遡れるならあの時に戻りたい！」と悶絶するほどの後悔を味わうとも露知らず……

06 Hと王妃と寵姫の関係（後書き）

王宮ロマンス小説

王宮に勤める女性たちの間で大流行中

実は王妃さまも愛読者

王妃の居室は朝から何やら騒がしい。

気持ちがはやり、昨日の今日で龍姫をお茶に誘つてしまつたが、よく考えれば準備が全く整つていなかつた。

「ねえサーナ。クロスやカーテン、変えた方がいいかと思うの」

「え！ 今からですか？！」

「やつぱり、そろそろ秋なのに白と青は変です。少し秋らしく、橙で統一しましょう」

「かしこまりました！ 」 うなつたら意地ですわ。誰か、すぐにクロスとカーテンを！」

「お茶とお菓子の準備は出来ていますし、後は……」

「王妃さま、でしたらお花も変更でござりますね」

「王妃さま、でしたら食器もご変更でござりますね」

「ええ、そうですね。お花は温室から早咲きの秋バラを、食器は」

「ひ、姫さまっ」

「そうそう、ユーパーナから持ち込んだ特別なものがあるんです。それを……」

「姫さまっ」

「どうしました？ サーナ」

「いつの間にか、タキスさまが」

「まあ」

というわけで、いつの間にか長椅子にタキスが腰かけていた。所在無げに室内の様子を窺つていたタキスであるが、王妃を始め

侍女の誰一人として気づいてくれず、ガックリとうな垂れている。リツツから頬まれた茶葉を届けに来たのだが、どうや、間が悪かつたらしい。

サーナはうんざりとした表情を隠そつともしない。「こんの忙しい時間に来やがつて、空氣読めよ」と思つてゐるのがダダ漏れである。

「それは、あまり良くないのでは?」

今日の午後に寵姫をお茶に誘つたことを嬉々と報告した王妃に、タキスは微妙な表情で言った。

「……何がですか?」

王妃は首を傾げる。

確かに寵姫への誘いは突然過ぎたかもしれないが、王妃と側室の交流は珍しくもない。それどころか、後宮をまとめる上では必要なことだ。

王との婚姻契約に『夫婦はお互いの私生活に干渉することを禁ず』とあるため、寵姫のことを王に伺つたことはない。しかし、王妃と側室が挨拶すら交わしたことが無い現状は問題だと思つのだ。

「いや、ですから。王妃は純粹にお茶にお招きしたいのだと思いますが、あちらがどう捉えるか……」

言いにくそうに語尾を濁すタキスに、王妃はさうて首を傾げてみせる。

「ですが、サーナは賛成してくれたのですよ」

今しがた届いた秋バラを活けているサーナに田配せをする。

「はい。陛下のお妃であるお二人が親交を深められることは、大変良いことでござりますわ」

サーナが澄まして答えると、なぜかタキスの顔がわずかに曇つた。

「私はジグジアに嫁ぎ、民族など関係無く、あなたやリツツといふ素晴らしい友人を得ることが出来ました。常々、もつとたくさんの方と親しくなりたいと思つてました」

「しかし……」

「口ヒもるタキスに王妃はにっこりと微笑んだ。

「大丈夫です。『龍姫さまはとても素晴らしい方と評判ですもの。きつと私とも親しくしてくれます』

王妃は積極的に王宮内の噂を拾うことはしないが、多くは自然と耳へと入る。

龍姫に関しての噂は、身分のことを除けば良いことばかりで驚くほどだ。

何より王が一途に愛し続けている女性である。素晴らしい方であることは疑いようもない。

サーナの賛成もあり、王妃はぜひ龍姫と親しくなりたいと、一大決心でお茶へと誘つた。

しかし、タキスの言わんとしていることも理解している。

「冷遇される王妃」は、王の寵愛を一身に受ける龍姫をうとんじている。事実はどうあれ、世間ではそう思われていることは承知していた。

その王妃が、今まで交流を持たなかつた龍姫をお茶に誘つ。何を思われるかなど想像はたやすい。

龍姫もさぞ驚いたことだろう。

けれど、情勢の不安定なこの時期に、公のお茶会や音楽会などを聞くことは避けたかつた。

悪戯に人々の好奇心や敵愾心を刺激し、何が産まれるか分からな

い。

「お忙しい時に失礼いたしました」
タキスは渋々納得し、王妃の居室を退出すると、サーナを柱の影に引きこんだ。

一見すると、王妃の侍女と軍将校の逢引のようしか見えない。実際、この光景を扉の隙間から見てしまった王妃がばつちり誤解していることなど、当の一人は知るよしもない。

もちろん一人の間に甘やかな雰囲気などあるはずもなく。黒い笑顔で牽制合戦を繰り広げていた。

「一体何を考えているんだ」
「あら、私はいつも姫さまのことしか考えておりませんわ」
「まあ、いい。今は難しい時期だ、ほどほどにしておけ」
「本当に失礼ですわね。それよりも、ほどほどになさいませ」と嫌われてしまっていますわよ」
「何の話だ」
「最近寝不足で辛そうですね～お体もダルそう～特に腰など～姫さまもとても心配しておられて～」
「……」
「余裕、ありませんのね」

タキスはサーナが苦手だ。

07 王妃のお茶会準備（後書き）

王妃さま、脇役に食われてる……
タキスはサーナを腹黒の怖ろしい女だと思つてます。
けど、サーナはタキス気に入つてます。

08 Hの賄薬（前書き）

評価をしてくれた皆様、お気に入りに登録してくれている皆様。
本当にありがとうございます。

さて。最近サイアス王は新たな悩みに悶絶していた。もちろん、王妃と寵姫に関わることである。

王がわずかに眉をしかめると、優秀な側近エドワードは懐からさつと胃薬を差し出した。

歴代の王達に重用され続け、その歴史はジグジア国建国までさかのぼるという、王家の秘薬である。どんな胃痛でもたちどころに治してしまうという。

しかし、精神的な理由の胃痛は、悩みの原因を断つしか方法がない。

こればかりは、いかに優秀なエドワードにもビリビリ出すことは出来ない。

何せ、どう考へても原因は王の自業自得であらせられるのだから。

42

「……俺は、何かしたか？」

苦い胃薬を飲み下し、王がボソリともらす。

「毎日大量の書類を裁き、会議に明け暮れ、趣味のひとつも持たず、国政と予算のことばかり考へているというのに……俺は王だぞ、それなのに、なぜこんな胃痛なんぞに苦しむばかりなんのだ」

ズバッと核心をついてやるが、己の立場をわきまえたエドワードは決してそれを口に出すよくなことではない。

「陛下、胸に手を当てよろしく考えてみて下さこ

しかし、何も言わずにおれよつか。

エドワードは誰よりも近くで王の成長を見守つてきた。

鶏をこつそり王宮に連れこみ大騒ぎになつた日も、初めて恋をした日も、王となつた日も。

そう、王の全てを知つてゐると言つても過言ではないと自負している。

王は幼少の頃より、のめりこんだら一直線。色恋にはいまいち疎く、女性に弱い。

大国の王であるのだから、妃など何人でも持てばいいのに、たつた一人の女性を持て余しウジウジと、見ている方が情けない。

? そんな性格を好ましく思つてゐるが、今回ばかりは自分で解決していただかなければと決めている。

何しろ、完全なる王の自業自得であらせられるのだから。

「お前はいつも遠回しな言ひ方で回りくどい。ハッキリ言え、説教の仕方がジジ臭い」

胸元をくつろげ、長椅子に転がり王は言った。

「だから未だに童貞なんだ」

「それは今は関係ございません!!」

「なんだ、本当だつたのか。侍女の間で噂になつてゐるが」

「な、何ですか噂とは」

王はニヤリとエドワードを見上げる。

「だから、お前はその年齢で童貞の変態……堅物だと」「はつづく」

「いやいやいや、氣なするな。男の価値はそんなことでは決まらん。無理にでも女を紹介しなかつた俺が悪い」

「あ、いえ、決して陛下のせいでは」

「案するな。童貞のまま死んだ男は妖精になれるらしいぞ。それも良いではないか、貴重だぞ。ははははつ」

「陛下つ」

「ドワードをからかつて遊んでも、王の胃痛は気紛れに治まるだけ完治することはない。

今も、胃痛の原因である人物が、キラキラと瞳を輝かせ王の前にいる。

「今度シェイラのところにお泊りに行つていいかしら？ 陛下、狩りで一日留守にするでしょう？ その時にパジヤマパーティをしましうつて話になつて」

頬を桃色に染めた龍姫は、今日も鈴蘭のよつに美しい。

王は「もちろんだ」と頷きながらも、内心は嵐のよつに突風が吹き荒れていた。

王は龍姫にバレぬよつ、じつたりと息を吐いた。これが胃痛にならぬにおられようか。

「ショイラ、パジヤマパーティしたことないんですつて。おしゃべりしながら、一緒にお風呂に入つて一緒の寝台で寝るの。楽しそうでしょ？ ショイラつてば実は寝起き悪いりしいの。そんなふつに見えないわよね」

？ 龍姫は王の様子には気付かず、楽しそうに話を続ける。

やれ東の庭園に共同でハーブを育てているだの、やれ有名な調香師におそろいの香水を作つてもらつただの、お忍びで歌劇を見に行つただの。

果てには俺の留守に一人でパジャマパーティーだと？

もはや、悲劇に見せかけた喜劇だ。

王妃の突然のお茶の誘いから一月。その日から、龍姫の口からは王妃の名しか出てこない。

「シヨイラがね」

「シヨイラと一緒に」

「シヨイラつてば」

つまり、周囲の過剰な心配を他所に、当の一人はとてつもなく仲良くなってしまったのだ。

その急激な接近に、王宮の誰もが目を見開いている。

もはや、これは拷問だ。

恋い焦がれる王妃の話を、龍姫から聞かされ続けるとは！

王妃がハーブの知識に長けていること、花の香水を好んでいること、寝起きが悪いなんてこと知らなかつた。

しかも、夫である自分ですら名を呼べずについとこつひ、アンは当たり前のよう、「シヨイラ」と名を呼んでいる。

もはや、悪夢だ。

何も知らぬ龍姫が王妃と親しくなつたことへの罪悪感。そして、自分を差し置いて王妃と親しくなつた龍姫への嫉妬。

王は自分でも持て余す感情に疲れ果て、また胃薬を飲む。

それにしても、王妃と一緒に風呂に入つて同じ寝台で寝るとは……なんて羨ましいんだ。俺は王妃の素肌すら見たことないところ。

『妻が望むならば夫はある程度妻の元へ通い世継ぎ誕生に努める』この条項のせいで、王は王妃が望まぬ限り触れることが出来ない。

『妻が望むならば』などと入れなければ、義務としてでも肌を合わせることが出来たかもしれない。

しかし、悲しいかな、王妃が王を望むことなど一生なさそうだ。

一応、現状は正しく理解している王である。

……一体俺はどうすればいいんだ。

サイアス王の苦悩は大陸一と言われるスニ溪谷よりも深い。

そして、その苦悩が報われる日は、まだまだ遠い。

09 王妃と寵姫の樂しき毎日（前書き）

思つたより間を開けてしまいました。
見捨てずに読んでいただければ嬉しいです。

最近の王宮は、何やら華やぎ賑やかだ。

庭園から花のようすに色鮮やかな一行が現れると、回廊を行き交う人々は一斉に頭を垂れた。

「皆さん、どうぞ頭をお上げになつて下さいな」

「私たちのことはお気になさらず、お仕事に戻られて下さい」

王宮の女主人、王妃と寵姫の言葉に、人々は「ほう」と息を飲む。美しく麗しいお二人に声をかけられれば、誰もが頬を桃色に染めてしまう。

「ショイラ、急がないと。もう仕立て屋をいらっしゃるかもしけないわ」

「まあ、もうそんな時間ですか？それでは、これをお願いします」王妃は手にしたいたカゴを侍女に手渡し、事細かに指示を下さる。今日は天気も良く、朝から寵姫とハーブを摘んでいたのだ。おかげで、ドレスは土まみれになつてしまい、仕立て屋と会う前に着替えなければならない。

ジグジア国では間もなく秋の豊穣祭りが執り行われる。その期間、王宮では毎夜のように舞踏会が開かれるため、王妃と寵姫は新しいドレスを作るため仕立て屋を頼んでおいたのだ。

「そうだわ、アン。居室まで戻つていたら遅くなってしまいますから、私のドレスをお貸ししますよ？」

王妃はにっこりと笑顔を見せる。

「ええ、ありがとうございます。大丈夫かしら？ サーナ」

寵姫は困ったようにサーナに助けを求めた。

「残念ながら、姫さまのドレスではアンリ・コ・タさまには少々お苦しいかもせんわ」

王妃はきょとんと首を傾げた。一方、王妃と寵姫の侍女たちは一人を見比べ、「ああ」と納得すると静かに視線を逸らす。

民族の違いもあり、王妃はとても小柄だ。十分女性らしい曲線を持つてはいるが、それでも華奢な体はまるで少女のようだ。とはいって、寵姫もジグジア国の女性の平均からすると小柄な方なのだが、王妃と並ぶとその差がはっきりと出てしまう。

特に、胸の辺りの。

サーナを始め、侍女たたの視線は一点に集中している。

柔らかな布を押し上げ、形の良い丸みを主張している寵姫の胸。そして、フリルとコサージュで誤魔化した控えめな王妃の胸。きょとんとしていた王妃だが、侍女たちの視線を辺り、寵姫の胸を見、次いで己の胸を見た。

明らかに見劣りしている、己のそこ。

「皆さん、すこしおし意地悪なのはありませんか？アン、あなたまでそう思つてはいるのですか？酷い……」

「シエ、シエイラ。嘘よ、ちつとも思つてないわ。皆も止めなさい、すぐにシエイラに謝つて」

オロオロと慰める寵姫を尻目に、侍女達は笑いを堪えながら日々に謝罪を述べた。

回廊のど真ん中で行われるやり取りを、使用人たちは微笑ましく、胸中では必死で笑いを堪えながら見守つていた。

例のお茶会から、王宮内ではこのような光景が日常となりつつあ

る。

初めは驚いた使用人たちも、今ではすっかり見慣れた光景だ。

今まではお互いに遠慮し居室にこもりがちであった二人だが、最近は毎日のようにお互いの居室を行き来し、庭園を訪れ、王宮内をそぞろ歩いている。

侍女を交え楽しそうに笑い、気さくに使用人たちに声をかける一人に、王宮は活気付き、華やいだ空気を放っているのだ。

王妃の毎日は今や寵姫で溢れている。

素敵なお友人と過ごす毎日は前にも増して充実し、きらきらと輝いて見えるのだ。

あのお茶会の日、寵姫はゆつたりとした簡素なドレスで訪れた。髪も簡単に編んだだけで、装飾品は一切身に付けていない。

ただ、その手には可愛らしいマーガレットの花束を持っていた。始めはお互いに緊張していたが、王妃の作ったお菓子を一口食べた寵姫の一言から全てが変わった。

「美味しいっ。え、これ王妃さまが？！」いえ、失礼いたしました」「ふふ。出来れば、普通にお話して下さいな」

それをきっかけに、二人は急速に親しくなった。

毎日会っているというのに、まだ話し足りない。もつと二人で素敵なことをしたい。

マーガレットの花言葉は「貞節」「誠実」……そして「眞実の友情」である。

王妃はすっかり、言葉では表せないほど、寵姫のことが大好きなのだ。

「ドレスありがとうございます。すぐに返すわね」仕立て屋との打ち合わせを終えた王妃の居室で、「寵姫が帰り支度を始めた。

「いえ、いいのですよ。私には見頃が合いませんし、よりしければもらつて下さい。ね、サーナ？」

「ええ、良くお似合いですわ。アンリエッタさま」氣を良くした寵姫がくるりと回つてみせる。

クリーム色の纖細なレースをふんだんに使つたドレスは、清楚なデザインだが体の線を惜しげも無く出すもので、寵姫に良く似合つていた。

「本当にいいの? じゃあ、もらつかけようかしら?」

寵姫が帰ると、王妃はふと疑問を口にした。

「私、あのようなドレス持つていたかしら?」

全く記憶の片隅にも残つていらない様子の王妃に、サーナは苦笑いしただけで何も答えなかつた。

あのドレスは、結婚当初に王がせつせと贈つて寄越したものひとつなのだ。

この頃、王妃の鈍感さに、育て方を間違えたかもしれないと悩み始めているサーナである。

そして、あまりに報われはい王に対し、わずかながら同情を禁じえない。

その時、執務室で書類に埋もれている王がくしゃみをしたとかしなかつたとか。

王妃に贈つたはずのドレスを寵姫の元で見つけ、王が悲しみに暮れ枕を涙で流したのは、また別の話である。

09 王妃と寵姫の樂しき毎日（後書き）

王さまが王妃さまに贈つたドレス。

すんごくお高いものです。

高い物贈るのに、似合ひ似合わないとサイズを考えない男性……

10 Hの決断（前書き）

お久しぶりで、いざこます。

感想を下さった皆様、評価をして下さった皆様、お気に入りに登録下さった皆様、本当にありがとうございます。

そこは、淡い色彩の空間だった。

優しく温かな空氣、陽の光がキラキラと輝き、Hは脇じたに皿を細めた。

白いモヤの合間から子供の笑い声が聞こえる。

「お父たまー」

ふいに右手が柔らかいものに掴まれた。見ると、可愛らしい幼子が自分を見上げている。

H惑つていると、その幼子はHの手を握つたまま叩タ叩タと歩き始めた。

その覚束ない足取りに、思わず幼子を抱き上げるとキャッキャと笑いながら、Hの髪を引っ張つていて。

幼子の頭を撫で、Hは視界の悪い空間を、ただ真っ直ぐに進んだ。しばらくすると、前方に複数の影が見え始めた。

「お母たまー」

「まあ、お父さまを呼んで来てくれたの？」

幼子はHの腕の中からもがき出ると、危うげな足取りで走り出す。危ない、Hが手を伸ばした瞬間、淡い色彩の空間は弾け飛んだ。

はつとHが顔を上げると、そこには見慣れた丸顔があった。

「——か、陛下？」

数回瞬きをすると、丸顔こと副宰相がわずかにこぢりて身を乗り

出していた。

そういえば、定例議会の真っ最中ではなかつたか。
どうやら一瞬うたた寝をしていたらしい。

素早く周囲に目をやれば、誰も王のうたた寝には気づかぬ様子で、
西街道の盗賊被害の報告が行われていた。

「お疲れでございますか？」

そつと副宰相が王の顔色を伺いながら囁く。

「大事ない。少々寝不足なだけだ」

王はすぐに姿勢を正し報告に耳を傾けているが、その声に霸氣は
無く、目の下にはうつすらと隈が浮かんでいる。

疲労の色濃い王を、副宰相は心配気に見つめていた。

例年秋から年末にかけて王宮は猫の手も借りたいほど忙しくなる。
豊穣祭と舞踏会の準備、年末調整、新年の準備と一年で最も忙し
い時期なのだ。

それに加え、今年はリダ国大使の訪問、西街道の盗賊被害、その
上貴族たちの縁談攻めが重なり、王の疲労は極限に達している。

「……というわけで、どうも盗賊はユーパーナ人である可能性が高い
ようであります」

軍の担当者はそこで一円言葉を切つた。ざわめく議会を見渡し、
驚きに声を上げる人々に頷いて見せる。

「ユーパーナ人だと？ 国境を抜け入り込んでいるというのか
一人の大臣の言葉に、そうだと多くの者が反応した。

西の国境は確かにユーパーナと接している。

国境は見渡す限りの荒野の中にある、警備は特に厳しい。一定区

間に置かれた砦と、毎日の巡回が厳しく国境を見張っている。

王妃との婚姻以来、両国の国交 は盛んになつたとはいえ、ジグジアを訪れるユーパーナ人の多くは商人や裕福な旅行者たちであつた。彼らは国境検問所を通り、入国許可証を得て国境を越える。その身元は確かで、盗賊のような「ゴロツキ」が潜り込めるはずも、もちろん不法入国することも難しい。

「本当にユーパーナ人なのか？」

この日始めて、王は発言した。

どうにも腑に落ちない。王の眉間に深くシワが寄る。

「被害者は、盗賊はユーパーナの衣装をまとい、顔は布で隠していたようですが、見えた肌は浅黒かつたと証言しているようあります」

「……そうか。で、西方軍も兵を出しているのだろう。まだ捕まらないのか？」

「は、残念ながら。盗賊は予想以上に人数が多く、さらに西方軍は人事不足でありまして探索に割ける余裕が無いようあります」

王の眉間にさらに深くシワが刻まれる。それを見た軍担当者が慌てて続けた。

「陛下。中央軍から援軍を割くことをご許可願います。若い兵士の中に自ら志願する者が多くおりますので」

「なるほど、それは助かる。では許可しよう。準備が出来次第西へ向かってくれ」

ジグジア国とユーパーナ国は長年国境を挟んで小競り合いを続けていた、いわゆる敵国同士であつた。

それが、王妃との婚姻を機にジグジアの同盟国といつたの属国となつたユーパーナには、現状に納得出来ぬ者も多いだろ。

従つて、西街道の盗賊がユーパーナ人である可能性もあるにはある

が、どうにも怪しい。？

まあ、捕まえてみれば分かることだ。

そうだ、くれぐれも王妃の耳には入らぬようにしなくては。

王は、積極的に民と交流を深めようとしている王妃を想つた。ユーパーナ人とジグジア人の民族の垣根を取り払いしたいのだろう。そんな健気な王妃が今回の事件を知れば、どれほど悲しむであろうか。

一刻も早く解決し、王妃の笑顔を曇らせることがあつてはならぬい。

王妃の笑顔を思い出しながら意味もなく資料をめくつてみると、いつの間にか議題が流れ、ホラスト元大臣が立ち上がつていた。

「えー私めからは、今日こそは陛下に新たな妃を迎えていただきた
く——」

その瞬間、議会は騒然となつた。

貴族や役人たちとは、皆同じ思いを持っていたが、明らかに乗り気でない王を恐れ、今まで誰も定例議会でこの議題を持ち出したことは無かつたのだ。

副宰相はその時、王の手の中で真つ一つに折れ、天井へと飛んで行くペンを見た。

「……というわけで、早急なるお世継の誕生が望まれるわけでござりますが。かくいう私めにも年頃の娘が三人ほどござります。いえ

「いえ、私の娘を妃になどと滅相もございません。ただ、妃になり得る娘は国中に五万どござります。諸外国からの縁談も含めますと、それは膨大な数に。陛下、なにどぞ、なにどぞ我らがジグジア国の未来のためにご決断下さいませ」

ホラスト元大臣の長い演説が終わると、貴族たちが一斉に立ち上がり、王へと詰め寄った。

「陛下！…我が娘の姿絵は拝見していただけたでしょうか？…」

「陛下！…我が娘は社交界でも評判の美少女で」

「ふんっ。お主の娘なんぞ化粧が濃いだけではないかっ」

「何を無礼なつ。そちの娘など社交界嫌いの根暗ブスと評判だらう！」

「はっ。色気過剰女より、聰明な娘な方が妃にはふさわしいのだ！」

「いいからお前らだけ！陛下、一度娘にお目通りの機会を…」

「あ、抜け駆けするでないっ」

「陛下、我が娘の方が」

「いえ、我が娘の方が」

「陛下あー」

詰め寄る貴族に議会は混乱し、王は近衛たちに囲まれ命からがら脱出に成功した。

「くそっ、ホラスト元大臣めつ…！」

「あの男一体何のつもりだ！？あのよつな議題は予定に無かつたと
いうに…！」

これがヤツの政治戦略なのか？！

あのよつに貴族たちが詰め寄り強制終了されなければ、王は議会とこう正式な場で決定を下さなければならなかつただりつ。

荒い息を吐きながら、とりあえず臥室に戻つて来た王は、重い衣装を脱ぎ捨てるに寝台に倒れ伏した。

最近、胃痛どころか頭痛や倦怠感にも悩まされてゐる王である。このまま少し眠りうかと考えてみると、エドワードが薬湯を持つて現れた。

「陛下。お休みになられるなら、その前にこれを」

紫色のドロップとした液体に顔をしかめたが、飲み干した王の顔色はなんと一瞬で明るくなつた。

「なんだ、胃痛と頭痛が治り体が軽くなつたぞ」

エドワードはただ満足そうに微笑んだ。

「でもじやないが言えない。海を越え他大陸から持ち込まれたといつ怪しこことこの上ないミイラが原材料などと……。

「しばらく人払いいたしましょつ。ゆっくり休まれて下さこ」

「ああ、すまない。……それより、今日のことは聞いたか？」

エドワードは頷いた。

「ヤツのせいで、今まで以上にあからさまな貴族どもが増えるだろう。どうすれば大人しくさせられるものか……」

王は心の底から深いため息をつくが、エドワードはそれを払い飛ばして言い切つた。

「そんな簡単なこと。王妃さまが『寵姫さま』、お世継ぎをお産みいただけばよろしこではありますか」

王は、さりに深くため息をついた。そんなこと、王にも分かっている。

だが、これには簡単には行かない理由があるのだ。

まず、第一王子を産むのは王妃でなくてはならない。

王妃以外の妃が第一王子を設ければ、後々争いの元になる可能性があるからだ。

しかし、王は王妃と交わした婚姻契約で「王妃が望まない限り子は作らない」としてしまっている。

このまま契約通りに王妃とは偽装夫婦を演じるならば良い。しかし、王の心はそれでは満足出来なくなってしまったのだ。

王は、当初のように寵姫だけを愛せない己を自覚している。

変わらず寵姫を大事に思いながらも、王妃も手に入れたいと本能が疼いていた。

王妃との子も欲しい、だが王妃には簡単に手が出せない。

世継ぎは早急に必要だ、だが第一王子は王妃の子でなければならない。

自業自得ここに極めり。

己で作った鎖にがんじがらめにされ、さりに首を絞められている。

「またそんな簡単なこと。王妃さまにお願いして契約を破棄させていただけば良いではありませんか。その上できちんと想いを伝えるです。人間関係の基本です」

エドワードがさすがに呆れたように投げやりに手を振った。

「龍姫一人を愛し抜くと誓つたならやり遂げてみせなさい」 「自業自得なんだから諦めたらどうですか?」 などとは、最早言つことすら馬鹿らしい。

王はエドワードの言葉に晴天の霹靂のような衝撃に襲われていた。想いを伝える? そういえば、王妃に愛を囁いたことなどあつただろうか。いや、無い。

いつも麗しい王妃を前にすると、何も言葉が出なくなつてしまつのだ。

そうだな、人間関係の基本は相互理解だ。いい歳をした男が、今さら照れるなど情けない。

その時ふいに、王の脳裏に議会中のうたた寝で見た夢が甦つた。可愛らしい幼子が、自分を「お父たま」と呼んでいた。

夢の最後に出てきた「お母たま」の声は、そういえば王妃に似ていたような気がしないか。

まさか、正夢なのだろうか。

王の中にムクムクと根拠のない希望と自信が沸き起つた。

そうだ、未来は明るいはずだ。

王妃に想いを伝え、きっと子を産んでもらおう。これで貴族どもも大人しくなるはずだ。

王は疲労も忘れ、王妃への愛の告白の筋書きに取り組んだ。

それは、人には見せられないほど甘ったるく、『都合主義の塊の駄作であつたが。

久方ぶりの穏やかな眠り中で、王は再びあの幼子に「お父たまー」と呼ばれ幸福を噛み締めていた。

この決断が、己を不幸のドン底に突き落とすとも知らずに……

10 Hの決断（後書き）

後の世で王さま作の「愛の筋書き」はどうからか出版され、ベストセラーに。

1.1 王妃のおぬみ相談室（前書き）

またまたお久しぶりです。そして明けましておめでとうござります。中々更新が進みませんが、どうぞ読んでいただければ幸いです。

爽やかな秋晴れの午後、東の庭園には今日も王妃と寵姫の姿があった。

王妃は白い毛の塊にしか見えない小さな生き物を抱き上げると、そつと膝の上に乗せた。

ピクピクと鼻をひくつかせ、長い耳をピンと立てる仕草が可愛すぎてたまらない。

「そんなに可愛いならショイラも飼えればいいのに」

「ええ、そうなんですけど。私、猫は育てたことがあるのですが、兎さんは初めてなので」

膝の上で丸まっている兎の頭を撫でながら、王妃は身悶えるようにため息を漏らす。

大きな黒い目とホワホワの白い毛が特徴の殺人的な可愛らしさを持つチャーリーは、最近寵姫が飼い始めた兎である。

寵姫の侍女の実家で大量に繁殖してしまったものの一匹を引き取つたのだという。

すっかりチャーリーに骨抜きにされてしまった王妃は、時間のあら限りチャーリーと過ごし、その愛を注ぎ込んでいる。

「聞いてる？ きっとまだ里親募集していると思うの」

「本当？ そうだわ、出来れば女の子がいいですね。チャーリーは男の子ですから」

王妃は大げさなほど喜んで笑顔を作る。

「聞いてみるわね」

微笑んで頷いた寵姫に王妃の瞳はわずかに揺れた。

「最近、どうも龍姫の様子がおかしい。

無意識にため息をつく回数が多く、食も細くなっている。何か悩みがあるに違いない。

チャーリーも、そんな龍姫を心配した侍女が連れてきたのだろう。実は王妃も龍姫が心配で、チャーリーをダシにして時間の許す限り入り浸つていたのだ。

悩みがあるならば相談して欲しい。

しばらく待ち続けたが龍姫は口をつぐんだまま、とうとう我慢出来なくなつた王妃は今日こそ聞き出そうと決めていた。

ちらりとサーナに視線を送ると、サーナはすぐに他の侍女たちに合図をし一人から離れて行く。何かあればすぐに駆けつけられる距離、しかし会話は聞こえない場所まで下がつてもらつたのだ。

「シェイラ……」

龍姫は困つたように王妃の名を呼んだ。

「ごめんなさいアン。私、もう黙つていられません。一体何を悩んでいるのですか？」

大好きな龍姫のため、どんな悩みでもすぐに解決してあげたい。

「……ダメよ、シェイラにはとても相談出来ないわ」

泣きそうなほど弱弱しい龍姫の言葉に、王妃は言葉を失つた。

「どうしてですか？！」

「とてもではないが納得できない。

「……シェイラのこと大好きよ……この関係を壊したくないの」

「私だつて、私だつて。

「私だつてアンのことが大好きです！　アンより大切なものなどありません！」

「……でも、ダメなのよ」

涙を滲ませる寵姫の悲痛な表情に、珍しく王妃の脳裏で何かが弾けた。

ああ、そうか。

王妃は思わず浮かせていた腰を再び落とすと、寵姫の白い手を取り指先で優しく撫でた。

「陛下のことですか？」

息を飲む寵姫に、王妃は」とさら明るく笑つて見せた。

実は、王妃と寵姫の間ではつきりと「婚姻契約」の話をした事はなかった。

王が「寵姫には説明してある」と言つていたので、王妃はあえて一人の友情の間にその存在を挟ませたくなかったからだ。

もしかしたら、寵姫は何かを誤解して捉えているのではないだろうか？ それで一人で思い悩んでしまったのだろうか？

そうであるとしたら私のせいだ。王妃は秘かに奥歯を噛み締めた。

「アンに伝えたことはありませんでしたが、陛下のことは良き友人として大切に思っています。でも、アンはかけがえの無い無一の存在です。私にとつては、陛下よりもアンの方が大切です」

涙を溜め瞳を見開く寵姫に、王妃は当然だと何度も頷いてみせた。

「陛下のことで、アンと私の関係が壊れてしまうなんてことあり得ません」

何故そのような恐ろしい事が起こりえようか。

もそのような事態になれば、全身全霊を持つて阻止してみせよう。

う。

「だから何も気になさらないで。私に話して下さい」

寵姫は鈴蘭の「とく美しい美貌を曇らせ、そつと王妃の手を握り返した。

「……え、と。では、陛下の御心が私へ向いている、と？」

ゆつくりと言葉の意味を飲み下した王妃は、次いで思わず吹き出した。

「何を言つてているのですか！ありえません、そのようなこと」

「ずっと握つていたままだつた龍姫の手を振り回しながら体を折り

曲げて笑い転げる王妃だったが、龍姫の沈んだ表情は動かない。

「ねえアン、本当に、そのようなことはつ、決してつ

あまりに突飛な悩みにしばらく笑いを止められなかつた王妃だが、一向に晴れぬ龍姫の様子に我に返つた。

ことの詳細を詳しく語れば、それは王妃が嫁ぎ、しばらくの後から違和感を感じていたらしい。

王妃との婚姻後、王は頻繁に体調不良を訴えていたが、初めは婚姻によつて増えた煩雜な執務による疲労だと思つていた。

しかし、婚姻が落ち着いても一向に王の体調は回復せず、ますます酷くなるばかり。

そして徐々に供にいても上の空なことが増え、時折龍姫を見る瞳に罪悪感が浮かび出した。

もちろん新しい女性の影などあるはずもなく、けれども「王妃とはこのような婚姻契約を結んだ！これが私の誠意だ、アン」と言つて抱きしめてくれた王を信じていたのだが……。

思いもかけず王妃と親しくなつたその時、龍姫は「やはり」という思いを抱いてしまつた。

そして、王妃の話を毎日複雜な表情で聞く王に、とうとう確信してしまつたのだ。

けれど王妃と親しくなった寵姫は、王と王妃の板ばさみで苦しんでいる。

王妃はどのように寵姫の誤解を解こうかと必死に頭を動かした。ジグジアに嫁ぎ半年。王とは決まった日以外に会つことはほとんどなく、会つても毎回のわずかな時間のみだ。

話題も最近の生活のことや公務のことなどばかりで、寵姫が心配するような関係では決して無い。

王妃は王に対し好意を感じてはいる。

しかしそれは国や今の生活を与えてくれた恩人としての好意、表向きには夫という名の良き友人としての好意なのだ。

何より、王は寵姫を愛している。

「愛する女性はただひとり」と、王妃に婚姻契約を突きつけたのは王なのだ。

王妃は『ジグジア国王とコパー・ナ国第十三王女との婚姻契約書』を正しくそらんじることが出来る。

なんと誠実で、愛情深く、素敵な男性だらうかと感心したものだ。あの時の王の挑戦的な瞳には、確かに寵姫への愛で溢れていた。

陛下がアンを裏切るなんて決して無いはず。

王妃は寵姫に届くよつ、切々と王の愛情深さを語つてみせた。しかし寵姫の頑なな思い込みを訂正することは出来ず、その日は初めて何とも後味の悪い別れを経験したのだった。

とにかく一刻も早く寵姫の心を軽くしてあげなければ。
おそれらへ些細なすれ違いが重なり、誤解に繋がってしまったのだ
らう。

男女の機微は纖細で複雑で難解なのだ。王宮内で流行しているロ
マンス小説でも良くある展開ではないか。
このような色恋沙汰で、寵姫との関係がぎくしゃくしてしまつこ
とは許せない。

涙に濡れているであらう寵姫を思い、王妃はその夜まんじりとも
せず夜明けを迎えた。

1.1 王妃のおぬみ相談室（後書き）

ほんの思いつきで最近ハヤリのウサギさん登場です。「うサンボ」を書いてみました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1330o/>

王と王妃の婚姻契約

2011年1月18日23時42分発行